

廿月分格よの月ねとさやまのわつて
あてあつらんかゝるとゆふふまてあつ結わると
はてしなきらん

一曰きの妻よこり今とてふ人の世々あ
まそては若中秋を伴馬を扶は日よ奥
孫を更さうと存よん但もを扶ようは
あつねと孫を更妻よこり國のあつたよ

又田村たき後よ室あ助あまら女房のあ
存よんまよとくよるあつたあつたあ
あ子中勢あむこの千を更りあつたあ
はあのかあうのあ勢あつてあまらあ
あまのあ人あつたあつたあつたあ
あまのあ人あつたあつたあつたあ
あまのあ人あつたあつたあつたあ

くちやてふをばらへんかきまじふ
親子もふ腹切きうとくふか程き
笠中へいへゆふと人界のをあま
りしむふうりかあるはるま

未二月

十日

おんあ

まはる〜三候か〜

おんあ

大石内藏助良雄浪人之内山科二位

秀和ト入魂ニ付江戸ヨリ秀和妻方

為暇乞来ル午十二月十日之書状

おんあ

るもくわく事くもくもくもくもく
いふくはくもくもくもくもくもく
便あうらんもくもくもくもくもく
はははのりもくもくもくもくもく
くもくもくもくもくもくもくもく
もくもくもくもくもくもくもくもく
あくもくもくもくもくもくもくもく

わうらららははのりもくもくもくもく
あはくもくもくもくもくもくもくもく
あはくもくもくもくもくもくもくもく
はくもくもくもくもくもくもくもく
はくもくもくもくもくもくもくもく
はくもくもくもくもくもくもくもく
はくもくもくもくもくもくもくもく
はくもくもくもくもくもくもくもく
はくもくもくもくもくもくもくもく
はくもくもくもくもくもくもくもく

下より上へは、
ましく、
今も、
後、
さう、
物、
と、

ま、
あ、
ま、
ま、
ま、
ま、
ま、
ま、

よきと悪しきとをわきまへて
かゝることをせよと年々告ぐは
おもしろくもいとむづかしい
事なれども十日の内に一日も
いふとまゝに言ひ出さずには
いへぬとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり

いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり
いふ事なりとぞいふ事なり

丁酉夜半
承旨及丁酉夜半
又出取之
出取之

十二日

丁酉

出取

大石
の助

あつた角少
出取
大石主税
短尺

大石主税良金之手跡能書之付江戸にて
短尺ヲ頼京都秀和妻方一越ス

故御鷹
兼亮

吉田忠左衛門兼亮江戸而自詩秀和妻贈ル

吉田忠左衛門兼亮江戸而自詩秀和妻贈ル

故御鷹

兼亮

あつちやう
しん
あつちやう
しん
あつちやう
しん
あつちやう
しん

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately seven lines, starting from the top right and moving downwards.

Vertical text on the left margin, possibly a page number or a reference mark.

Handwritten text enclosed in a rectangular box, consisting of two lines of cursive script.

Handwritten text below the first box, consisting of a single line of cursive script.

Handwritten text below the second box, consisting of a single line of cursive script.

Vertical text on the right margin, possibly a page number or a reference mark.

くさき

秀子

おんよ

十内秀和親子切腹上聞テ女房え

奉國寺ニテ自害

辞立歌

はるや子れ侍らんものといさる侍
あふらひきにおもひわくる侍

後撰集終

附録

鳩泉室直清義人録曰 小野寺秀和号十内秩百五
十石京師知郎此云京都屋敷留守居秀和在京好學礼見師
儒聞赤穂之變棄家累赴之京師人聞赤穂衆報仇
皆曰秀和必在其中果然其臨終和歌曰

今波早言乃葉種毛無利計里何乃為禿天露結羅無

死時年六十一

小野寺秀富 号幸右衛門秀和養子本姓大高氏

與其兄忠雄皆秀和嫡子也秀和無子以秀富為後

無職死時年二十八

伴蒿蹊近世時人傳曰

赤極義士小野寺十内秀和書丹子の反方氏の女之義氣風
雅俱よそ夫の初小配して六とたむつまじかりきる有え
秀和よりかきとる敷直れ書よみくしり中畧復讐のこと
おろりてはは婦人のよめるうこの秀和の志すに感一介
こえりもそ外を傳りび平生によろしういまぬとも

うこの師とせし合勝茶宴のゆくりれ入もつる茶茶乃
ぼとせしに教そあるが中もくくあにまあつ

さる人の墓に詣りてまあありて 秋指は亡人の秀和の母
養子とあはし

まゆもすてとふあへへいそれにゆえそめこれ茶の下風

ま風を影して

咲そむるか山の標白ひまき人むらりひまきお風

繁樹てふ名水の影よて

くれそり林といそをれし風におあうつらるまはとみお

あどよろしとおはゆそ見最ふ来の回家よはあがら養に与せ

びそしは殺を懼るあよや秀和よ過をすそ才英を傍他

家よはくはたよらやと秀和むらりかども見最ふ来より